

趣意書

公開シンポジウム「医の公共的威信と社会的信頼を取り戻す」

— 同志社大学生命医科学部開設を記念して —

かつて、国民皆保険のすばらしい制度のもとで、日本の医療は高い公共的威信をもち、医療に対する深い社会的信頼があった。病院の物理的条件も医療設備も必ずしも、満足できるものではなかった。医師、看護師たちの勤務条件は、諸外国の場合に比べて、信じられないほど、過酷で、しかも経済的処遇もあまり良くなかった。しかし、大多数の医師、看護師たちは、高い志を保って、患者の苦しみ、痛みを自らのものとして、献身的に診療、看護に当たっていた。国民の多くはこのことを高く評価し、医師、看護師を始めとして医に関わる職業的専門家に対して心からの appreciation と感謝の念をもっていった。

日本の国民医療費は GDP 当たりで見ると、OECD 諸国のなかで極めて低い水準にある。しかし、日本の医療は、どのような基準をとっても、最高に近いパフォーマンスを挙げてきた。この理想に近い状況は、度重なる医療費抑制政策によって維持しつづけることはきわめて困難になってきた。いま、日本の医療は全般的危機といいいい状況にある。かつては日本で最高水準の医療を提供していたすぐれた病院の多くが経営的に極めて困難な状況に陥っている。とくに地方の中核病院の置かれている状況は深刻である。数多くの医師、看護師たちは志を守って、医の道を歩むことが極めて困難な状況に追いやられている。何故このような深刻な事態に立ちいたってしまったのだろうか。この深刻な事態を招来させた、そのもっとも根元的なものは、市場原理主義とよばれる経済学思想である。

市場原理主義は簡単にいってしまうと、もうけることを人生最大の目的として、倫理的、社会的、人間的な営為を軽んずる生きざまを良しとする考え方である。市場原理主義は先ず、アメリカで起こった。そして、チリ、アルゼンチンなどの南米諸国に始まって、世界の数多くの国々に輸出され、社会の非倫理化、社会的鞆帯の解体、格差の拡大、そして人間的関係自体の崩壊をもたらしてきた。この間のくわしい事情は、ノーベル賞経済学者ジョーセフ・スティグリッツ教授の2冊の近著『世界を不幸にしたグローバリズムの正体』と『世界に格差をバラ撒いたグローバリズムを正す』に克明に描きだされている。

この市場原理主義が日本に全面的に輸入され、日本社会はいま、戦後最大の危機を迎えている。日本では、市場原理主義が、経済の分野だけでなく、医療、教育という社会的共通資本の核心にまで、その影響を及ぼしつつあるからである。市場原理主義の精神に則って、医療の分野で、規制緩和、効率化の名のもとに、実質的には官僚的管理を極端な形に押し進めてきた結果、現場の医療関係者たちはいま極限的な状況に追いつめられている。この間の事情を、臨床医の立場に立って日本の医療が置かれている危機的状況についてすぐれた分析を展開したのが、出月康夫『日本の医療を崩壊させないために』、小松秀樹『医療崩壊』、鈴木厚『崩壊する日本の医療』である。そこには、日本の医療がおかれている苦悩の現状が vivid に描きだされ、同時に、日本の医療の歩むべき道が明快に示されている。

この日本の医療のおかれている危機的状況のもとで、私たちに明るい希望と未来への展望を与える 2 つの日本医学会総会が開催された。「人間科学—日本から世界へ ~ 21 世紀を拓く医学と医療—信頼と豊かさを求めて~」をテーマとして開催された第 26 回（会頭 杉岡洋一教授）と「科学技術の発展を人類の幸福のために — 知識と知恵を融合する」を基調として開催された第 27 回（会頭 岸本忠三教授）である。また、黒川清教授は『大学病院革命』を出版されて、日本における医学教育のあり方を根元的に改革して、21 世紀的状況のもとにおける日本の医の基盤をいかに構築するかについて示唆に富んだ、説得力をもつ議論を展開された。いずれも、日本における医の公共的威信と社会的信頼を取り戻すために、核心的な役割を果たすものである。

2008 年 4 月、同志社大学生命医科学部が開設されることになった。この新しい学部は、「いのちの科学を学ぶ」をモットーとして、リベラルアーツの教育を重んずる同志社大学の歴史的伝統のなかで、人類を幸福にするための生命科学の科学・技術を学ぶことを目的としている。21 世紀を拓く医学と医療の基礎を学ぶと同時に、知識と知恵を融合するものでもある。それはまた、鴨下重彦教授が長年にわたって説いてこられた日本における理想的な医学教育制度のあり方を基調として、黒川教授が『大学病院革命』のなかで展開された、リベラルアーツの教育を終えてから医学の専門教育に進む医科大学院の構想への実践の道を示すものでもある。

新しい学部の開設は、私個人にとっても、重い意味がある。1991 年 5 月 15 日、*New Rerum Novarum* 『新しいレールム・ノヴァルム』と題する歴史的な回勅がローマ法皇ヨハネ・パウロ二世によって出された。私は、ヨハネ・パウロ二世を補佐して、その理論的枠組みの作成に携わったが、その基本的考え方は、社会的共通資本を基調として、人間の心といのちを大切にす経済学の再構築を試み、医療、教育、地球環境を中核とする社会的共通資本をもっと大切にして、一人一人の人的尊厳を守り、魂の自立をはかり、すべての人々がゆたかな生活を営むことができる理想的な社会を求めて協調的営為を行うことの重要性を強調した。ヨハネ・パウロ二世はその後、1992 年、ヴァチカンの中に社会科学アカデミーと生命アカデミーを開設された。2003 年 4 月、同志社大学社会的共通資本研究センターが開設されたとき、私は、ヨハネ・パウロ二世の社会科学アカデミーの縮小版と考えた。このたび開設される同志社大学生命医科学部は、生命アカデミーの拡大版であって、ヨハネ・パウロ二世が日本に託された夢がみごとに花咲きつつあるという感慨をもたざるをえない。

2007 年 9 月 6 日

日本学士院会員 宇沢弘文